学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　日本の小中学校における総合的な学習の時間の実施に関する考察

申請者氏名　滕 雪丽

総合的な学習の時間の実践における問題として以下のことが挙げられた。

①指導に必要とされる方法が共有されていないため、「結果、内容設定、質の維持、到達目標、評定に困惑、混乱、不安」につながる。

②４割の教師が学習効果に疑問や不安を抱いたりしながら授業を行っている。

③教師の期待値・推測値と児童生徒の回答による学習効果の分析については、教師の推測値と児童生徒の実態（肯定度）との間のズレが見られ、特に中学校では、教師の過小評価があって、実態把握が十分ではないと指摘された。

このような動きの中で、本論文は、総合的な学習の時間の学習指導要領に基づいて、顕在的・潜在的カリキュラムの視点から学校の実施状況及び学習効果を明らかにすることで、総合的な学習の時間の存在意義や、教育課程での位置づけを明確することを目的としている。研究方法は、まず、学習指導要領を分析して、それに基づいて総合的な学習の時間の運営環境及び指導方法をフィールド調査を通して分析する。次は、学習理論から、学習指導要領に示す学習方法や学習形態を通して育てられる資質と能力を探る。最後に、学習指導要領に求められる力及び学習理論から育てられる資質と能力が、実際に総合的な学習の時間の学習活動では、如何に実践しているかを児童生徒の学習過程や感想文を通して分析して、学習効果を明らかにする。

各章の概要は以下である。

第一章では、総合的な学習の時間に関する教育界での論争、1998（平成 10）年の教育の社会的背景と課題を踏まえて、総合的な学習の時間の創設当時の学校改革の基本的な方向を概観して、創設の趣旨、及びその後の 2003 年の改訂と 2008（平成 20）年までの改訂の経緯を明らかにする。次に、2008 年の学習指導要領を中心にして、総合的な学習の時間の教育目標、学習領域、学習活動、指導計画作り、授業時数、学習状況評価などの項目を分析して改訂の内容を把握する。

第二章では、総合的な学習の時間の学習理論の研究について考察していく。ここで、総合的な学習の時間の学習活動を顕在的カリキュラムと潜在的カリキュラムの視点によって学習理論から育てられる資質と能力を明らかにする。

第三章では、総合的学習の時間の設置のために、教員研修をはじめ、校内の支援体制、学校と社会との連携の体制整備といった運営環境について考察を行う。

第四章では、学習指導要領に求めた探求的学習、体験学習、協同的学習は学校でどの

ように実施されているのかを考察していく。小学校や中学校を対象として、授業参観や担任教師のインタビュー調査、指導案作りの分析を通して、学校教育目標作りや学習活動の流れ、教科との関連などの教師の指導方法を明らかにする。

第五章では、学習理論からまとめた探求的学習、体験学習、協同的学習で育てる資質と能力が如何に学習の過程や学習の結果に関連付けているかを考察していく。

第六章では、第五章までに考察した問題をまとめて総合的な時間で育成される能力と学習理論との関係を明らかにする。

結論としては以下である。

１、総合的な学習の時間の新設当時の教育課題、創設趣旨、及び戦後の総合的学習の変遷を明らかにする上で、総合的学習の時間に求める力と現代社会に求める力を分析した。結果として、総合的な学習の時間における教育目標としての「生きる力」は、現代日本社会に求める「ポスト近代型能力」と一致したことが明らかにした。

２、学習指導要領に示された探求的学習、体験学習、協同的学習を通して、どのような資質と能力を育てるのか、デューイの教育哲学、ピアジェとヴィゴツキーの教育心理学及びアップルの教育社会学の視点から分析を行った。その結果、育てられるものを①知識と技能②思考力、判断力③精神の発達・人格形成④社会性・対人関係⑤言語と表現力⑥価値・規範・態度という六項目にまとめて、総合的な学習の時間の学習活動を通して理論上育てられる資質と能力を明らかにした。

３、学習指導要領に求められた総合的学習の時間の運営環境を調査した結果、教員養成制度や校内の支援体制が整備され、さらに、学校と地域社会との情報交換ネットワークが構築され、支援体制が機能していることが明らかになった。

４、学校の指導方法については、各学校の教育目標づくりや学習内容、学習のあり方、学習評価などは、ほとんど学習指導要領通りに実施していることが明らかになった。さらに、教師のインタビュー調査と指導案作りの分析から考察した結果、中学校と比べて、小学校のほうが、指導案作りは具体性、児童の学習活動への把握が目立つことが明らかになった。

５、学習評価の視点から、子ども達の学習過程や感想文、作品などを分析した結果、探求的学習、協同的学習、体験学習を通して、子どもの学力向上につながる学習と人格形成が見られることが明らかとなった。よって、実際に学校で実践されている総合的な学習の時間を顕在的・潜在的カリキュラムの両面から見ると、学習理論に基づいてまとめた六項目①知識と技能②思考力、判断力③精神の発達・人格形成④社会性・対人関係⑤言語と表現力⑥価値・規範・態度という六項目が、すべて含まれていることが分かった。

総合的な学習の時間で育てられる資質と能力の考察を通して、カリキュラムに総括される分野と教育的効果から、子どもの学力向上と人格形成と統一する今日的意義が認識できる。

氏　名　（　本　籍　）	TENG XUELI　〔滕　雪丽〕　（中国）
授　与　学　位	博士（学術）
学　位　記　番　号	東アジア博甲第 72 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項
研究科，専攻の名称	東アジア研究科　東アジア専攻
学　位　論　文　題　目	日本の小中学校における総合的な学習の時間の実施に関する考察
論　文　審　査　委　員	主査　山口大学　教授　福田隆眞
	副査　山口大学　教授　石井由理
	副査　山口大学　教授　葛　崎偉

【論文審査結果の要旨】

本論文は日本の小中学校で実施されている総合的な学習の時間の教育課程、実施内容、教育方法、教育評価を、学習理論の観点から分析し、学習成果を実態調査を通して考察したものである。

論文は序章と６章から構成されており、結論を導き出している。序章では、研究目的、内容構成、先行研究、研究方法について述べており、先行研究の調査においては、総合的な学習の時間に対する学習理論からの考察が見られないことを指摘し、本論文の独創的な観点を明らかにしている。

第１章では、平成10年の教育課程で設置された小中学校での総合的な学習の時間の学習指導要領において、それまでの総合学習の論争を踏まえて設置の趣旨、教育方法としての問題解決学習、設置以降の課程の経緯、学習内容、評価について明らかにしている。

第２章においては、総合的な学習の基盤となる学習理論について、デューイ、ピアジェ、ヴィゴツキー、アップル、佐藤学、天野正輝、安彦忠彦等を採りあげ、問題解決学習、認知的発達、子供と環境との関わり、顕在的カリキュラムと潜在的カリキュラムと、総合的な学習の時間との関連づけを試みている。

第３章、第４章は実態調査による考察である。第３章では、総合的な学習の時間の実施環境を調査分析している。山口県教育庁、やまぐち総合教育支援センター、山口県下の小中学校７校を対象として、教員研修、実施状況を調査して、問題点を明らかにしている。そして第４章において山口県下の小中学校７校を対象に、総合的な学習の時間の教育目標、学習内容、指導案作成、教科との関連、評価について実態調査を行い、分析を通して、学習指導要領との関連、学習理論との関連を明らかにした。

そして第５章において、学習理論においてまとめた探究的学習、体験学習、協同的学習で育成される能力や資質が、いかに実際の学習過程や学習結果と関連付けられているかを

明らかにした。そこでは、学習理論に基づく６つの視点である、①知識と技能、②思考力、判断力、③精神の発達・人格形成、④社会性・対人関係、⑤言語と表現力、⑥価値・規範・態度、に分けて学習内容と学習結果との関連付けを行っている。

第６章は結論である。第１章から第５章までの個々の問題点と結論を総合して、学習理論の観点から総合的な学習の時間の教育課程、教材、学習方法、運営方法、教科との関連、評価について明らかにしている。問題点として、本論文では発達段階の検証を教科教育での検証にとどめているが、総合的な学習の時間独自の発達段階の検証を今後の問題として捉えている。

以上の論文の内容から、審査委員は以下のように判断した。

１．独創性について

総合的な学習の時間における教育課程、学習指導要領、教育内容、教育実践を学習理論の観点から検証した論文は先行研究に見られない。そして、学習理論の学習内容、学習の成果を分析的に関連付けている点は、独創的である。

２．厳格性について

先行研究の渉猟については重要な文献等を調査している。学習理論については、研究主題に関連するものを吟味している。実態調査では、多角的に調査を行っている。こうした点に厳格性を認めることができる。

３．論理性について

本論文の特徴である学習理論と総合的な学習の時間の関連については、試行錯誤を繰り返しながら、整合性を追究して、最終的な論文に至った。問題提起から結論までに学習理論との関連付けを適切に行い、論理性のある論文となっている。